

25 耳掛け型メトロノームを用いた吃音訓練 –成人吃音者を対象に–

研究所 感覚機能系障害研究部 酒井奈緒美, 森浩一

病院 第二機能回復訓練部 小澤恵美, 餅田亜希子

【はじめに】吃音者はメトロノームに合わせて発話することで吃音が減少することが古くから知られており、日常生活場面における訓練の中でも耳掛け型のメトロノームが利用されてきた (Brady, 1969)。しかし国内では携帯できる耳掛け型メトロノームは存在せず、また海外でも訓練室外における耳掛け型メトロノームの効果を定量的に分析した研究は見当たらない。そこで本研究では、国内で初めて開発したプログラム式の耳掛け型メトロノームを、成人吃音者が訓練室外の日常場面において使用することで、吃症状の改善を目指す。

【方法】耳掛け型メトロノームは、毎分6–200クリック間でテンポを設定でき、その変化幅は10ないし20%に設定できるようになっている。音量は20–80 dB SPLの間の2点を設定でき、クリック音の周波数は500から4000 Hzの間を500 Hzステップで選択できる。本研究の対象者は、訓練室内の課題をクリアしており、かつ日常の特定の場面で特に発話が困難な成人吃音者とし、このメトロノームを日常生活場面において毎日15分以上装用してもらう。今回提示する症例1については、耳掛け型メトロノームを装用する日常場面として、使用者にとって実際に使用が可能な場面、そして特に発話が困難な場面である、電話場面と家庭でのコミュニケーション場面を選択した。効果の判定は、訓練場面と電話場面における録音記録の分析と、①毎日のメトロノーム装用・非装用時の吃頻度、②一定期間ごとの吃症状、③メトロノームの効果の3種の7段階評定質問紙による自己評価とした。

【結果と考察】訓練室における吃頻度が時間経過とともに減少し、かつ各訓練日においてメトロノーム装用時に吃頻度が減少する傾向が認められた。また日常生活場面に関しては、本症例は発話が困難な電話場면을避ける傾向にあったが、耳掛け型メトロノームの導入により、積極的に電話ができるようになった。そして日常の電話場面における吃頻度も、装用開始直後には一時的に増加傾向が認められたものの、装用2ヶ月半後からは減少しており、耳掛け型メトロノームは日常生活場面における吃症状を減少させるのに有効であった。本症例に関しては、使用者の希望により途中でテンポを遅く設定し直しているが、その時期と吃症状の減少との関連も示唆されたことから、適切なテンポ設定が重要であることも示された。また、電話場面における吃症状の経過や毎日の自己評価からは、装用に慣れるのに時間がかかることも推測された。そして自己評価の結果からは、症例自身は吃頻度以外の面、すなわち発話の自然さや回避傾向の減少という面での改善を評価していることが認められた。最後に、本研究は今後も対象者を増やしての検討を進めるが、訓練効果が日常場面に般化しにくい患者に対して、日常生活場面における吃症状の改善を可能とする方法を提供していく必要があると思われる。

【謝辞】この研究は厚生労働科学研究費（15130801）の補助を得て行われた。